



図166 遺跡の位置
5万分1地形図「新潟」

前郷遺跡 江南区駒込一丁目・駒込

前郷遺跡は、駒込集落の西側、砂崩集落との間に位置しており、亀田砂丘の南側斜面に立地している。石鏃や須恵器・土師器などが出土することは、明治時代中ごろから知られていたが、昭和三十四（一九五九）年からの砂取り作業で、高さ約八メートルの砂丘が崩された際に、縄文時代中期～晩期の土器、弥生時代中期の土器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の須恵器や土師器のほか、管玉の未完成品など玉造りに関わる遺物が発見された。砂丘削平後の現在の標高は、約三メートルである。ここでは、弥生時代中期について記す。

弥生時代中期の土器には、北陸地方を中心に分布する櫛描文系の土器のほか、長野県や東北地方南部のものと類似した土器が見つかった。また、櫛のような工具で、縦横の模様を付けた東海地方の特徴を持つ土器も見つかっており、長野県を経由して伝わってきたと考えられている。

玉造りに関する遺物では、管玉の材料となる石を擦り割るときに使う擦切石器や、管玉の未完成品が発見された。未完成品はすべて、鮮やかな青緑色をした凝灰岩製であった。この遺跡の人々は、管玉の石材となる色鮮やかな凝灰岩を入手する交易ルートを持っていたのであろう。



図168 石鏃 酒井和男氏・個人所蔵

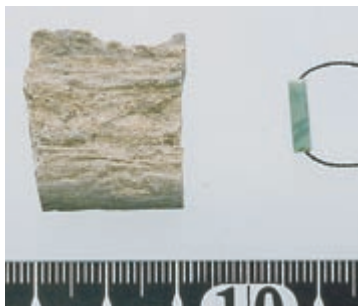


図167 擦切石器片(左)と管玉の未完成品(右) 酒井和男氏所蔵

図一六七の未完成品は、管玉の上下両方向から貫通孔が開けられているが、最終工程である表面の磨き作業が行われていない。大きさは、直径約三ミリメートル、長さは約一二ミリメートルで、他の未完成品から見て、この大きさの管玉だけを作っていたと考えられる。同図の擦切石器片は、扁平で横に細長い擦切石器の、両側が欠けたもので、図の下側が刃部である。

石鏃もたくさん見つかった。なかには「アメリカ式石鏃」と呼ばれる、付け根が両側に張り出した、東北地方南部に特有な形のものもある。同じ形の石鏃は、六地山遺跡(一〇六ページ)や古津八幡山遺跡(一四ページ)などでも見つかっている。

弥生時代中期の前郷遺跡に暮らしていた人々は、各地の特徴をもつ土器が出土していることから見て、様々な文化圏の人たちと交流していたようである。ここで作られた管玉は、どこに供給されていたのであろうか。